
姫と騎士の恋愛事情

恋華 咲

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

姫と騎士の恋愛事情

【コード】

N6234C

【作者名】

恋華 咲

【あらすじ】

お転婆姫と、それに振り回される騎士の物語。甘く切ないファンタジーロマンス。

姫君と騎士

十姫君と騎士十

「姫君！ 何処に行くおつもりですか！？」

豪華な城には似付かわない小さな裏門のひとつ。そこで彼女は呼び止められた。

ビクリと肩が揺れるその姿は、なにか心にやましいものがある証拠。呼び止めた男、ブリーズ・レイクは眉間に皺を寄せ、未だに背を向ける彼女につかつかと靴の音を響かせて歩み寄る。

「チェリー様、お願いですからおとなしくしてて下さい。わざわざその様な格好までして……。毎回探す此方の身にもなって下さい」

その言葉のほとんどには、呆れが占めていた。普段より一オクターブ低い声からして、怒りも加わっていると判る。

身体をこわばらせている彼女は、外に繋がる扉に片手をかけながら

「な、なんの事ですか、ブリーズ様。私はメイドの、その、リリイですよ」

と言った。

黒髪のおかっぱに、白と黒がバランスよく取り入れられたメイド服。肌触りの良いシルクの手袋は純白で。

どこから見たって、立派なメイドだろう。そう、それを見たのが他人ならば。

「もう演技は良いですから、早く着替えて自室にお戻り下さい。まだ稽古は終わっていませんでしょう」

だが、生憎彼は騙されない。他人と言うには、近すぎる関係であったのだ。

ブリーズは微動だにしないメイド姿の彼女の肩に手を置き、軽くやんわりと引く。

ゆっくりと振り向く彼女の表情は、頬を膨らませ、不機嫌、といったところだ。

「なによ、ブリーズのケチ。少しくらい見逃してくれたっていいじゃない」

彼女はブリーズの腕を振り払い言う。先程とは比べ物にならないほど口調が酷い。

それに彼は眉をひそめて答えた。

「お言葉ですが姫。貴女が城から抜け出して怒られるのは俺です」「私のために怒られてよ」

彼女は扉に背を預け、即答する。そして頂の髪を掴んで、勢いよくその手を振り下ろした。

途端に、黒髪は外され、代わりに美しいブロンドが現れる。彼女は頭を軽く振った。それに伴い、長い金髪も揺れる。

「そんなカツラまで用意して……」

ため息をつきながら呆れるブリーズ。それが気に食わなかったのか、彼女は鼻を鳴らし、彼の横を通り過ぎた。

「姫君」

「うるさいわねっ。戻ればいいんでしょ、戻れば！」

ベツ、と舌を出して彼女は広い廊下を走っていく。きっと行き先はチェリーの部屋だろう。ブリーズはもう一度ため息をついた。

ここは小さな王国。自然が豊かで王も優しく、人々は平和に暮らしている。

そしてこの国には王子と姫がいた。王と妃の二人の子供である。

王子、ビオラは既に後取りと決まっていた。いつかはどこかの姫と結婚すると、自分でも理解している。

それが王子として生まれてきた宿命であり、役目でもある。

ビオラはそう言った。

そしてそれは現実となり、隣国の次女の姫が婚約者となる。

しかし、ビオラの妹君、チェリーは違った。政略結婚なんて真っ平、結婚する相手くらい自分で決めると家族に宣言したのである。

お陰で来る話来る話全て蹴り、18の今でも色気のある話はない。その上、チェリーはよく城から抜け出した。人一倍好奇心旺盛で城内では誰よりも町が好きなのだが、一国の姫という身分上、そうそう町になんか行けないからである。

色々な変装をしては、ピアノや踊りの稽古を投げ出し出て町へ行く。これには城の者たちは何度も困った。

しかし、こここのところ彼女は脱走を失敗している。お目付き役に阻まれてしまっているのだ。そのお目付き役というのが、ブリーズである。

貴族の中でも高位なレイク家の一人息子である。

レイク家は、古くから王家に使えてきた。常に護衛として側に控えていた存在。

そしてそれは今も変わらず続いている。

そのため、レイク家であるブリーズも王女のチェリーの護衛としてついていた。

だが、彼にはもうひとつの仕事がある。それが

「だいたいブリーズは執事でもないのに、私にかまいすぎなのよ。なに？ 私のこと好きなの？」

「……姫君、それは」

「あー、うるさいうるさい。騎士は騎士らしく戦ってなさい！」

そう、彼のもうひとつの仕事とは騎士。と言っても、ほとんどは本業である護衛をやっているが。

「あーあ、つまんないの」

そう言い、チェリーはドサツとソファに埋もれる。着替えた薔薇色のドレスがひらりと揺れた。

ブリーズはそんなチェリーにはしたくないですよ、と咎めて

「姫君、私が貴女の側にいるのはそれが私の役目だからです。そもそも、この国は王のおかげでとても平和なのはチェリー様も知っておいででしょう？ 戦ってるなんて言ってはなりません」

そう言った。彼のもつともな説教に、彼女は嫌そうな表情を隠しもせずため息をはく。

相変わらず硬いわ。

チェリーがそう思うのも仕方ない程、彼は真面目だった。家柄の事情、きつと厳しく育てられたのだろう。

柔らかく、その上大きすぎるソファに腰を深く座り直し、チェリーはブリーズを見据えた。視線に気付いた彼は、チェリーの隣へと歩みよる。

「ねえ、ブリーズ」

「……なんですか？」

手を握るチェリーに、先程抜け出しそうとしたばかりなためか、ブリーズは不信な目を向けた。

チェリーはそんな彼の様子に内心舌打ちをするが、見目麗しい微笑を張り付ける。

「私ね、もう疲れたの。だって、いつもレッスンばかりの生活なんか嫌。その上花嫁修行なんて言い出したら耐えられないわ。このまま城にいたら私、好きでもない奴に婚約されちゃう」

だんだんと涙声に変わりゆくチェリー。その翡翠色の瞳には雫が溜って。そこにあるのは紛れもなく、か弱い少女の姿であった。

「……だから、私をさらって」

上目使いではっきりと言い切る。

「チェリー様……」

「ブリーズ……」

とろんとした甘い雰囲気を醸すチェリー。ブリーズは彼女の手をきゅっと握った。

いや、きゅっとどころか、ぎゅうつと

「つて、痛たたたたたっ！」

「泣き落としには効きません」

「ちょ、分かった！ 分かったから離して！」

あまりの力の強さに、チェリーは本当の涙を滲ませる。無茶苦茶に腕を振る彼女、ブリーズはそっと手を放した。

チェリーは手を撫でながら、目の前の護衛兼騎士を睨む。だけど彼はどこ吹く風。清ました顔が彼女を苛立たせた。

「護衛のくせに手荒な真似しないでよ！ それでも騎士!？」

「誤解しないで下さい。俺は確かに貴方の護衛ですが、下僕ではないんです。甘やかす気はありません。騎士道にしたって、間違っていることは間違っていると正すことが」

「ああー、もう！ なんでブリーズは私の一言にそんないっぱい返してくるの!？」

癩癩を起こすチェリーにブリーズは眉間に皺を寄せる。この二人はお互い顔に出やすい。

付き合いの長さのせいだろうか。

チェリーが物心ついた時には、既にブリーズは側にいた。もう十年以上の付き合いだろう。

チェリーはその間にどんどん美しくなり、他国の王子からたびたび婚約を申し込まれるようになった。

だけどこで間違えたのか、性格はお転婆そのもの。高飛車なところは高貴さが漂うが、姫にしては口調も言動も酷かった。

またブリーズは、幼い頃は必死にチェリーを守ろうと健気だった。いつも姫様姫様言っってはくっついて回って。チェリーもそんなブリーズに甘えていた。のは昔の話。

今では騎士となり自信もつき、敬語を使いつつも、チェリーを咎めたり叱ったりする。それに対しプライドの高いチェリーは、だんだんとブリーズを振り回すようになった。

仲が悪いわけではないが、昔のようにじゃれあったりはしない。

別にいいけどさ……。

チェリーはブリーズを見て、ため息をついた。それにブリーズは反応する。そりゃそうだろう、人の顔を見てため息をつくなんて、失礼な話だ。

「なんですか姫君」

「別に……」

そう答えて、チェリーはソファに寝そべる。赤い靴は床にほっばった。

高い音をたて、ばらばらに崩れる靴。ブリーズはそれを二足合わせて整えてから、チェリーの腕を引いた。

それにチェリーは怪訝な視線を向ける。何、と小声で聞くと、彼は口を開いた。

「……貴女は、慕っている人でもいるのですか？」

「は？」

思わず間抜けな声が出たチェリー。突拍子もない言葉に、思考が追いついてくれない。

そんな彼女の事などおかまいなしに、ブリーズは続けた。

「町中で逢い引きでも？ だからそんなにしてまで行こうとするのですか？」

ぐいつ、と腕を引き、詰め寄る。前髪が触れそうなくらいの至近距離だ。

「ちょ、ちょっと待って。なんでこんな不機嫌オーラ出てるの？ 怒らせすぎたか、と心の中で後悔するチェリー。」

「だけど『謝る』という選択肢は、プライドの高い彼女の中になく残っているのは『反論』。チェリーは目の青い瞳を睨みつけ言葉を放つ。」

「そんなんじゃない。私はただ、なにか暇潰しになるような事を…」

「つまり娯楽ですか。貴女も18歳なんだから、少しは考えて下さい」

指摘され、チェリーは言葉に詰まる。

「考えて下さい、という言葉の意味を彼女は結婚ととった。自分の身分くらい知ってるからである。」

「分かってるわよ！ だからこうして素敵な恋を期待して町に行くのっ」

「素敵な恋……ですか」

「あ、今馬鹿にしたわね！？」

チェリーはブリーズの胸板を押し、なんとか距離をとろうとする。彼はあっさりと身をひいた。

一応チェリーの護衛なんだから、その通りにすると分かっていたが、物足りないなんて思ってしまった。

だが、そんなこと言えるはずもなく、チェリーは目の前に立つブリーズを見上げるかたちで睨む。

「どうせブリーズみたいなオッサンには私の気持ち分からないだろうけど」

「オッ 。俺はまだ26です！」
「私から見たらオッサンよ」

意地悪く笑い、肩をすくめるチェリー。ブリーズの顔には、余計なお世話だと書いてあった。

…… もっと落ち込めばいいのに。
そう思った瞬間、ハツとする。

うわ、私なんて酷いことを。だってブリーズ、なんか急に大人びてきて、余裕綽々みたいで気に入らないし。

「もっともっと、私に振り回されればいいのよ」

ため息と共に呟いた。

「なにか言いましたか？」

少し屈んで、チェリーの顔を覗きこむブリーズ。チェリーは彼の青い瞳に映る自分を見つめた。頬が僅かに紅潮している。

「……気に入らない」
「は？ んっ!？」

チェリーはブリーズの襟を掴み引き寄せて、口唇を重ねた。

それは本当に一瞬で。

瞬きをする暇もないくらい。

ブリーズが目を見開いた時には、既にチェリーは離れていた。

「いい気味」

チェリーはそうこぼし、部屋から走り去った。扉の閉まる音が、彼女を追い掛けるように響く。

「…まったく、あの方は……」

ブリーズは片手を額に当て息を吐いた。僅かにだが、顔が朱色に染まっている。

赤い靴が、絨毯の上に乱雑に転がっていた。

姫君と騎士（後書き）

読んで下さりありがとうございます。感想など書いて頂けたら嬉しいです。

姫君の消閑

十 姫君の消閑十

廊下を通り、裏門を抜け、チエリーは城外へと出た。靴を脱ぎ捨てて来たため、裸足のままである。

走っている途中、何度かメイド達に話しかけられたが、それに返す余裕はチエリーになかった。

むかつく。むかつく。むかつく。

町へ着いても、チエリーのわだかまりは消えない。擦れた足は酷く痛々しかった。

「……せめて着替えれば良かったな」

自分の姿を見て呟く。

足元まであるふんわりとしたのドレスは、町中では目立ちすぎた。こんな格好、貴族などの地位がある者くらいしかしない。先程から人々の視線がチエリーに突き刺さる。

さすがに居辛くなり、彼女は人気のない路地へと移った。

狭く薄暗い路地は少し不気味だった。高くあがった太陽の光が届いてくれない。

チエリーは一息ついて、塀に寄りかかる。

ドレスで走るのは困難で、城を出るまで何度も転びそうになったものだ。

「ああ……。やってしまった」

呟いたチェリーの膝が、がくりと崩れる。先程のことを思いだし、自分からしたというのに、顔は真っ赤だった。

……駄目だ。誤魔化せない。やっぱ私、ブリーズのことす、好きなんだ。さつきは勢い余ってキ、キスしちゃったけど……って、思いだしたらヤバイって！

必死にかぶりを振る。口唇の熱は今も残り、それがチェリーの羞恥心を更にあげた。

後悔先にたたず、とは正にこのことだろう。

チェリーはぎゅっと膝を抱いて、顔を埋めた。

どうしよう。ブリーズと会いにくいや。

そう心の中で漏らすチェリー。だが、彼はチェリーの護衛なのだから、嫌でも顔を合わせるだろう。

「チェリー？」

真剣に悩んでいたチェリーに、聞き覚えのある声が届いた。そつと顔をあげる。

「……あ、リーフ」

不思議そうな面持ちで立っていたのは、以前町で知り合った少年リーフ。

彼は座りこんでいるのがチェリーだと分かると、パツと表情を輝かせ、チェリーのもとに駆け寄った。

こてん、と首を傾け

「どうしたんだ？ その服」

と尋ねる。チェリーはギクリと肩を揺らしつつも、なんとかクールに誤魔化した。

誤魔化した、というより、あやふやにしたというほうが正しい。リーフがあまり深く聞いてこなかったから、ばれなかったという事だ。

「なんかいつもと別人じゃん。お姫様みたいだ」

リーフはドレスの裾のレースを軽きつまみ、そう言う。チェリーはその核心ついた言葉に、またもや焦った。

だが、リーフはそんなことより、つまんだ際に見えた裸足に釘付けに。

「な、なんで裸足なんだよ!? しかも赤くなってるし……」

チェリーの足に触れ、心配気に眉を下げるリーフ。大袈裟な彼女苦笑いしながら、大丈夫、と言おうとした時、チェリーはある事を思いついた。

「そうだ、そうだよ。ナイスリーフ! よくぞ私を見付けてくれた」

そう言って勢いよく両肩を掴むと、リーフは理解不能、といった表情をする。

チェリーはリーフの服を指差し叫んだ。

「それ貸して!」

「……………はあああ!?!」

いきなり何を言い出すんだ、というリーフの主張はあっさり拒否

され、チェリーに着てる物をひっぺ剥がされる。そして

「よっと」

「!?!? 何お前脱いでんだよっ」

突然ドレスを脱ぎだすチェリーに、慌てふためくりーフ。手の平で目を塞いでいるが、指と指の間はすっかりちやっかり開いている。そうこうしてる内に、チェリーはリーフの服に着替え終わった。換わりに今まで着ていたドレスを、半裸のリーフに被せる。

「じゃあね、リーフ。その服記念にあげるよ」

去り際に笑顔で言い放ち、チェリーは町広場のほうへと走っていった。

「お、俺の服返せー!」

生憎、返事はない。

男装中のチェリーは、当てもなく町中をだらだらと徘徊していた。いつもは楽しい景色が、今日はどれも寂れて見える。それもきつと、ブリーズが原因だろう。

捜しにも来ない。

それは彼女にとって、悲しいと共に安心もあった。だが、複雑な心境は変わらない。

期待したかと問われれば、それはイエスかもしれないと、チェリーは思う。

認めるには、天邪鬼な感情が邪魔をして、悔しくてならない。

「なんだかなあ……」

肩を落とし、うなだれるチェリー。

すっかり疲れてしまった彼女は、広場の噴水の淵に腰を下ろし、町を行き交う人々を見つめた。

泣いている子も、喧嘩してる男女も、笑っている人も、みんなみんな幸せそうだ。それはこの国の平穏さを表している。

私が何処かの身分の高い男と結婚すれば、この平和は続くのかな。

そう思うと、チェリーはやりきれない気持ちになった。自分が本当にわがままな子供に感じる。

「なに柄にもなく悩んでるんだか」

苦笑まじりに呟く。

好きなんだから仕方ない。今までそう割り切ってきた。

好きな人と一緒にになりたいと思うことがいけないだなんて、チェリーは考えたくなかった。

「迎えに来なさいよ、ブリーズ……」

弱々しい声でこぼす。手の平に顎を寄せ、無機質な瞳に人混みを映した。

その中に、一際目立つ者がひとり。

やけにキョロキョロと辺りを見回し、明らかに挙動不審だ。

あ、こっち向いた。
パチリと目が合う。

「……………!!」

チェリーは驚愕し勢いよく立ちあがった。人混みをかきわけて、自分のもとへと来る彼。あまりの驚きに声が出ない。

「チェリー様！」

チェリーのもとへ駆け寄り、彼は曲げた膝に手をあて、息を調える。そんな彼の姿に何と声をかけていいのか分からず、口をパクパクと動かすだけ。

しばらく考えをまとめ、出てきた疑問はこれ。

「な、何で此処にいるの？」

「……………分からないのか？」

「えっ」

幾分か低い声で逆に聞き返すブリーズに、チェリーは首を傾げた。
なんか怒ってる？

そつと顔をあげた彼の眉間には皺が刻まれていて、額には汗が滲んでいる。頬は僅かに赤らんでいた。普段とは違う彼の様子に、またもや首を傾げる。

どうしたの、そう言おうとした瞬間肩を強く掴まれた。

「ひゃっ」

「困るんだよ。不意にキスしてきたと思ったら勝手に去るし、城内を探してみても何処にもいないし！ いったい何れだけ探したと思ってる！？ しかもなんだその格好は。男装なんてして……………!!」

一気に捲し立てられ、チェリーは啞然とした。今まで小言を言われたり、叱られたりした事はあったが、こんなに怒ってる彼を見るのはチェリーにとって初めてだからである。敬語すら今はなく、立場など逆転している。だけどチェリーは驚くと共に、顔を緩めた。嬉しい、とすら感じる。

だって、私のためにこんな風に乱れて焦って混乱してるんじゃない？ 嬉しいに決まってる。例えそれが、護衛という立場のせいでも。

「……なに笑ってるんですか」

不服そうに言うブリーズ。いつのまにか敬語に戻っていた。それにチェリーは少しだけ肩を落とす。姫という地位なんて、彼女にとつては邪魔なだけだ。

そのおかげで側にいれるんだけどね。

それならば、利用できるだけ利用してしまおうか、なんてチェリーは考える。

「ね、ブリーズ」

「…何ですか」

チェリーは彼の手を握り、青い瞳を奥まで見つめて一息に言った。

「私をさらって」

一瞬、見開かれる目。だけど、すぐにそれを細め、彼は緩く首を振った。

「なりません」

「じゃあ結婚してよ」

即座に返す。我が儘な言葉。チェリーはそう理解してた。だけど、止まらない。

自分だけのためにこうして、広い町中、人混みから探し出してきて、彼女は有頂天になっていたのだ。

「私は、私はやっぱり好きな人と結婚したい」

「俺では身分が足りません」

「関係ないよ」

ブリーズは困ったように表情を歪める。それが肯定なのか否定なのか、チェリーは理解に苦しんだ。

「……………なりません」

もう一度、彼は言う。

「今、間があつたけど？」

「姫君っ！」

カアツと赤く染まる彼の精悍な顔に、チェリーは笑った。瞬間湯沸かし器。そんな物が頭に浮かぶ。

彼女は愛しさで胸いっぱいになった。

「じゃあいいわ」

そう言い放てば、ブリーズは、えっ、と声をこぼす。先程の言葉とは裏腹な寂しげな表情に、内心吹き出すチェリー。

どっちなのよ。

チェリーは微笑み、少し背伸びし彼の首に腕を絡ませる。

「絶対うんって言わせてみせるから」

「姫君……」

困ったようにため息をつくブリーズに、チェリーは爪先立ちして

「先手必勝」

チュツ、とくちづけた。

騎士の葛藤

ナチュラ王国　　。

面積も狭く、お世辞にも発展してるとは言えない。それでもこの国は平和で、豊かで、幸せに溢れている。

ブリーズは窓から見える城下町を見て、そう思った。聞こえてきそうな笑い声。太陽のような笑顔。愛情の込められた言葉。波乱からは程遠く、戦争などもうずっと前に終わってから一度もない。それはとても、穏やかな国。

「ブリーズ様！　姫君がまたいなくなりました！」

……………本当に平和なことだ。

十騎士の葛藤十

もう何度目になるかわからない姫君の脱走。退屈嫌いのチェリー姫の事だ、刺激を求めて町へと行くのだろう。

仕方ないとはブリーズも思っていた。限られた自由時間、敬語を使う周りの人間、規則的な生活、拒否の許されないレッスン、決められた人生。あまりに閉塞的だ。

例えチェリー姫でなくとも、嫌になるだろう。

ビオレ様はよく耐えてたな。

我が君主を思い、ブリーズは感心のため息をついた。王子の身分上、毎日が勉強。婚姻も隣国の姫と政略結婚された。それでも彼は、何ひとつ不満をこぼさない。

人に優しく自分に厳しく。

尊い方だ。ブリーズはそんな王子を尊敬してる。けれど、それと同時に心配もしていた。自分を抑えすぎているのだろうか、と。

その点では、チェリー様は自分に正直だな。

好きだから町へ行く。嫌だからレッスンを抜け出す。そして結婚も……。

「どうにかしてあげたいが、俺の立場じゃ無理だな……」

自嘲気味に呟いた言葉に返事はない。ブリーズも貴族とは言え、王家とは天と地の差だ。その上、チェリー姫の専属護衛。

愛しい、とは思う。その高飛車な態度も、時々見せる脆さも。幼い頃から誰よりも側にいた。情がわかない訳ない。その気持ちは、敬愛なのか恋愛なのかはブリーズにとって定かではないが。

「また、探さなきゃな……」

そう漏らした彼は、口調こそ困り果てていたものだけど、表情は穏やかな笑みだった。

「やっほー、リーフ！ 久しぶりっ」

町中の広場、ふんわりとしたエプロンドレスを身に纏った少女が、前方にいる少年に手を振った。

声をかけられた少年は、不機嫌そのものの表情で振り向く。

「久しぶり……だと？」

「あ、あら。素敵なお顔……」

たじろぎながら、チェリーは一步後退った。それを追うようにリーフはチェリーへと踏み出す。

嫌な予感がしたチェリーは、本能に従い回れ右をした。そのまま持ち前の運動神経で逃げ去ろうとしたが、

「逃げんなー！」

「ひゃっ！」

首ねっこを掴まれ、手足をいくら動かしても進めない。

「離しなさいよ！ レディに向かって何するの！」

そう叫びチェリーはリーフの鳩尾に肘鉄を喰らわす。ピンポイントでやられたリーフは、ぐえっと蛙が潰れたような声を出し、その場に蹲った。

あまりの苦痛に鳩尾を押さえ、リーフは涙目で彼女を睨む。

「お前のどこがレディなんだよ、この馬鹿力……」

「馬鹿力とは失礼ねっ、伊達に護身術を習ってないわ」

「はあ？ お前護身術なんか習ってるわけ？」

いまだに涙の糸を引きつつ、仁王立ちするチェリーにリーフは尋ねた。

その瞬間、チェリーはしまったと後悔する。

チェリーは姫という身分上、ダンスやマナーばかりではなく護身術の稽古もしていた。だけど、ただでさえ姫ということは秘密なわけ……。

「ま、まままあね！ その、知り合いにっというか、なんていうか」

上手いとは言えない彼女の言い訳に、リーフはふーん？と首を傾げる。

深くはつつこまない。

それがいつの間にかお互いの暗黙のルールになっていた。

その証拠に、チェリーもリーフのことは何も知らない。どこに住んでるかも、何をしてるかも。町で出会う友人、仲こそは良いが、所詮そんな間柄である。

余計な詮索も、干渉もリーフはしない。チェリーは彼のそんなところも好きだった。

「だいたいチェリーは、身勝手だ。前は大変だったんだぞ？ 服も靴もとられて、半裸状態。表道歩けなかったんだからな」

痛みがひいたのか、目の高さを同じにしてリーフは多少荒い口調で言う。

チェリーはそれに、あら？とこぼした。

「だから代わりに私のドレスあげたじゃない」

「あんなヒラヒラしたやつ着れるか！」

「照れ屋ねえ」

「そういう問題!?!」

いちいち叫ぶリーフに、チェリーは眉をしかめ、肩をすぼめる。そして、ため息混じりにこう言った。

「じゃ、あのドレス売っていいよ。けっこう高い値で売れると思うんだけど」

「そ、そんな事できるか!」

「……え?」

意外な返答に、チェリーは目を見開く。リーフは、はっとして慌てて口許をおさえた。よく見ると、顔も赤い。

「それってどういう……」

そう聞き終えるより早く、チェリーの耳に聞き覚えのある声が届いた。

今、最も聞こえては困る声。

「ど、どうしよう!」

紅潮したリーフとは対照的に、蒼白となるチェリー。慌てふためく彼女に、リーフは意味が分からないと首を傾げる。

「何がどうしようなんだ?」

「つまりどうしよう! とりあえずどうしよう! だからどうしよう!」

「落ち着けよ……」

混乱状態のチェリーを諭そうとするが、まったく聞いていない。そここうするうちに、声の者は現れた。チェリーにとって、愛しいけど、会いたくない人物。

「か、かくまって」

小声でそう言い、承諾を得る前にチェリーはリーフの後ろに隠れた。リーフはマントをしているので、丁度前から彼女の姿は見えない。

「その少年」

怪訝な顔つきをしてたリーフに声をかけたのは、この国の騎士であり、身分の高い貴族の青年。

「ブリーズ＝レイク……」

リーフは思わずそうこぼした。狭い路地、ブリーズは彼に近付く。

「…お前、どこかで会ったことないか……？」

「！ な、ないない！ 初対面だよ」

唐突に聞かれ、千切れそうな勢いでリーフは首を振った。ブリーズはそうか、と呟きながらも、ふにおちない表情をしている。

な、なんの話だろう。

後ろに隠れた彼女は、息をひそめて自分の護衛の姿をつかかった。眉間に皺を寄せ、難しい顔をしている。

……でもそれはいつもの事か。

むしろ彼が笑っているほうが珍しいくらい。チェリーは大して気

にしないことにした。

「で、俺に何の用だ？」

身を乗り出そうとするチェリーを肘でつつきながら、リーフはブリーズに尋ねる。

それにブリーズは咳払いをひとつして、逆に聞き返した。

「女性を見なかったか？ お前より2つか3つくらい年上だ。綺麗なブロンドで、瞳は翡翠色。身長はお前と大して変わらない」

うわ、思いつきり私のことじゃない。

チェリーは隠れて良かったと胸を撫で下ろす。

そして、急かすようにリーフの背中をつついた。彼はそれに小声で分かったと言い、

「さあ。チェリーなんて娘、見てないな」

そう答える。

「……そうか。引き留めて悪かった」

ブリーズはそう言って、踵を返した。チェリーは彼の姿が見えなくなるのを確認して、盛大に息を吐く。

そしてリーフの背中に身体をあずけ謝礼した。

「ありがとね、リーフ」

「今度なんか奢れよ」

「お安いごよう」

二人はにっと笑い、お互いの手をパンツと弾いた。

表道を歩きながら、ブリーズは考え事をしていた。騎士であり貴族でもある彼は町中では目立ち、すれちがう人々はみんな振り返る。あの少年、どこかで見た気がするんだが……。俺の思い違いか？

未だに引つ掛かるリーフの存在。しかし見た気がすると言っても、身なりは裕福そうには感じなかったし、實際話をしていてもピンとこない。

姫君の事も知らないと言っていたし。

そう思った瞬間、ブリーズは何か違和感を感じた。そう、先程のリーフの言葉。

『チエリーなんて娘、見てないな』

ブリーズはチエリーの名前を教えただろうか？

否、外見については言ったが、名前までは教えてない。再び生まれる疑問。

「……………」

ブリーズはウターンし、路地へと走った。

「少年！」

「うわっ！ な、なんだよさっきの騎士か。まだ俺になにかあんの？」

突然の不意打ちに、面食らうリーフ。ブリーズはものすごい形相でリーフに歩みよった。

「チェリー様はどこだ」

そう言って。

その言葉にリーフは跳ねる心臓を抑え、努めて冷静に答えた。

「だ、だから知らないって」

「嘘をつくな。現にお前はさっき」

チェリー様の名前を言っただろう？

そのブリーズの言葉に、リーフは首を傾げる。表情はどういう意味だ？と尋ねていた。

ブリーズはそんな彼の様子を見て、呆れたように小さくため息をこぼす。リーフはムツとし、ブリーズを下から睨んだ。

「…いいか。俺はチェリー様の名前なんて、お前に教えていない。なのにお前は、チェリーなんて娘見てない、こう言ったな」

そう説明すれば、リーフはしまったという顔をする。ブリーズはその表情を見逃さなかった。

追い討ちをかけるように、リーフに詰め寄ろうとしたそのとき

「リーフ、お菓子買ってきてあげたわよ！」

飽きるくらい聞き覚えのある声が、ブリーズの耳に届いた。ゆっくり振り返れば、そこには町娘の服に身を包んだ姫君の姿が。

「…チエリー様…」

「え？　　ゲッ！」

ブリーズと目が合った瞬間、とてもじゃないが淑女とは言えない奇声を発し、彼女は即効回れ右をする。

「姫君っ！」

予想してたと言わんばかりに、ブリーズは主の後ろ姿を追った。

「……………姫君？」

呆然と立ちすくむリーフが小さくこぼす。
疑惑の種、ここにひとつ。

その頃ふたりは、全力疾走中であつた。

「止まり下さいチェリー様！」

「嫌よつ。止まったら捕まるじゃない！」

「……分かりました。怒らないし、連れ戻したりもしません」

その言葉に、チェリーの速度が僅かに落ちる。それにブリーズはしめたと言わんばかりに距離をぐつと縮めた。

「本当？ 本当ね？ 嘘ついたら承知しないわよ！」

「俺が貴女に嘘つくはずないでしょう？」

「……っ」

彼女の頬が朱を帯びる。惚れた者からそんな台詞を言われたら、どんな人でも照れるだろう。チェリーも例外ではなかった。

信じるわよ。

彼女が足を止める。疲れたのか、息が切れ汗も滲んでいた。

「……捕まえた」

ブリーズはチェリーの肩を優しく掴む。ゆっくりと振り返る愛しき姫君。

「ブリー……」

「城に戻りましょう」

「！？ だつてさっき……！」

チェリーが全て言い切る前に、ブリーズは彼女を掬った。言わば、

横抱き。お姫様だつこである。

「なっ
」

驚くチェリーを気にせず、彼は当たり前のように町中を歩いて。

「何するの!」

「城へ戻ります」

そこでやっと騙されたと気付いたチェリーは、ブリーズの腕の中で暴れながらこつ叫んだ。

「う、裏切り者!」

愛しい我が主。

今までもこれからも。

守るべき存在。

本当はこのまま、連れ去りたい。

だけどそんな行為、許されないから。

姫と護衛の関係はそのままです。

俺は貴女に従いたい。

でも逆らいたい。

貴女に幸せになってほしい。

貴女を幸せにしたい。

甘く切ない葛藤は、案外心地好いんだ

。

姫君の憂鬱

十 姫君の憂鬱十

限られた者しか入ることが許されない王宮。そこへチエリーを抱いて帰ってきたブリーズを見て驚く使用人は、最早少なかった。

我が姫君が護衛に捕まるのは、日常茶飯事とまでになつていたからである。

それを偶然見掛けたチエリーの兄、ビオレはお転婆な妹と多少強引な騎士の姿に、ただただ苦笑いをこぼした。

姫の部屋。其処に着くと、ブリーズは彼女をやつと降ろす。チエリーは口を尖らせ、自分をここまで連れてきた騎士を睨んだ。それに気付いているのかいないのか、ブリーズは全く素知らぬ顔である。チエリーは眉間にシワをよせ

「嘘つき。私、二度とあなたの言うこと信じない」

と、吐き捨てるように言った。靴を荒々しく脱ぎ、天蓋付きのベツトに寝そべる。柔らかい羊毛の布団が、彼女の動きに合わせて沈んだ。

ブリーズは呆れた眼差しを向けるが、何も言わない。チエリーはそれにまたムツと頬を膨らませた。

「なによその顔。…あ、分かった。ブリーズ妬いてるんだ。私がリーフと一緒にいたから。ね、そうでしょ？」

はやしたてるように言うチェリー。ブリーズはため息を小さく吐いて、天蓋のレースを開いた。チェリーは面白そうに目を細めている。

「姫君、あなたはどうしてもそうなのですか」

「どつという意味よ」

「……………」

「無言のため息つくの止めて」

どうやら彼はチェリーを怒らせるのが余程上手らしい。それが無意識なのか故意なのかは定かではないが。

チェリーは傍らにあった枕を抱きしめ、寝たままブリーズを見上げる。絡む視線。何かを探るような彼の蒼い瞳に、チェリーは首を傾げた。

「……………チェリー様」

ブリーズはたっぷりの間をあけて、重たい口を開く。チェリーは次の言葉を待った。

「あのリーフという少年は、貴女の知り合いですか？」

予想より何でもない質問に、チェリーは拍子抜けする。しかしブリーズの表情は真剣そのものであった。それに多少尻込みながらも、

「知り合いついてどうか……………、町での友達？」

と答える。

「友達……。一体どこの者です？ 出身は？ 年齢は？ 住所は？」

一度にたくさんさんの問いをするブリーズ。彼女はそれに戸惑いつつも、何でそんなことを聞くのか、逆に尋ねた。

当たり前だろう。そんなに個人情報を知りたがるなど、普通に考えたらおかしい。

ブリーズは伏し目がちにチェリーを見つめ、こつこつ呟いた。

「見覚えがある、ような気がします。いつ何処でかは、よく分かりませんが」

ずいぶん曖昧な返答である。チェリーはますます怪訝な顔をした。

「町で見たんじゃないの？ 言うておくけど、私はリーフの名前くらいしか知らないからね」

そっけない姫の言葉に、ブリーズは片眉をあげた。不可解、といったところであろう。

「名前だけ？ あんなに仲良くしていたのですか？」

「あ、やっぱり妬いてる」

「チェリー様！」

赤くなるブリーズに、彼女は冗談よと口角をあげた。明らかにわかれている。そう感じたブリーズは、盛大なため息を吐いた。ため息ばかりの彼に、チェリーは少しばかり目を細める。

初々しい若草色の瞳。それに似合わないやや挑発的な流し目は、

彼女に色香を纏わせた。長いプラチナブロンドが、真珠のような首筋を這う。ブリーズは唾を飲んだ。

「今まであまり意識してなかったが……。」

そう、チェリーは美人なのだ。それこそ、他国の王子から求婚される程に。そのお転婆さえ直せば、なんて麗しい姫だろう。

「ブリーズ？」

チェリーの声に彼はハツとした。彼女は小首を傾げ、上目使いに我が護衛を見上げる。チラホラと見える鎖骨が艶めかしい。

一度意識してしまったブリーズは途端に気まずくなり、わざとらしく咳払いをした。ベットに寝そべるチェリーから視線をはずし、

「とにかく、今後あの少年のことで何か分かることがあったら教えて下さい」

と、早口に言う。

「だから何も知らないって言うてるのに。」

次はチェリーがため息をつく番だ。彼女は正直、リーフについてどうかしたいと思っていない。顔と名前以外知らないが、実際には良いのだ。それに余計な詮索はしたくない。

顔を合わせれば、気兼ねなく世間話なんかをする。お互い詳しい内情は聞かない。姫という正体を隠してるチェリーにとって、そんな仲は心地好い距離であった。

「……どこ行くの」

そんなことを思いながら、寝台から離れるブリーズに向かい、小さく声をかける。その呼び掛けに彼は振り向かず、

「執務に戻ります」

と言い、部屋から出ていった。閉まるドアの音が、やけに大きく感じる。足音が遠ざかるのを聞くと、チェリーは肩をすくめた。

あれから数日。ブリーズの目もあって、チェリーはこここのところ全くと言っていいほど町に行っていなかった。

ピアノ、ダンス、マナー、e t u ……。稽古ばかりの毎日に、チェリーのストレスは溜るいっぽうである。

自室のベッドで本を読んでいたチェリーは、視線をそつと窓の外へと移した。

灰色の空。どんよりとした重々しい雲がゆっくりと流れている。その様子から、風が強いことも把握でき。いつもの晴天がまるで嘘のように、気持ちまで沈む天気模様である。

彼女も例外ではなく、盛大なため息をついた。

再び視線を手の中に戻す。文字がひたすら並べられた本。物語の内容は悲恋のロマンスだ。暇潰しで読み始めた本だったが、すっぴりのめりこんでしまっている。

でも、余計に憂鬱になるわね。

両想いのふたり。数々の障害が彼等を襲う。周りの反対。不治の病。欠けた記憶。愛だけで乗り越えるには、辛すぎる。

まだ半分ほどしか読んでいないため、結末は分からない。だけど願わくば、全ての人が笑えるハッピーエンドを。彼女はそう心のな

かで祈る。

「…報われない…」

チェリーは小さく呟いた。

命をかけた、世紀の大恋愛？

……よく云う。結局はエゴだ。傷付いて、傷付けて、それで何が残る？

欲しいのでしょうか？

奪われたくないのでしょうか？

独りは嫌なのではないでしょうか？

だから愛しつづける。

ああ、違う。それはあくまで私の醜い部分。

フィクションで作られたヒロインに己を重ねるなど、なんて愚かな行為。

そんなことを考えていると、不意に窓を叩く音が響いた。冷たい雫の旋律。ああ、本当になんて憂鬱な天気なんだろう。彼女の眉間に皺が寄る。

もともと、雨なんて滅多に降らない国だ。嫌な予感がしてならないのは、きつとチェリーだけではないはず。そしてそういう事に限って、当たってしまうのだ。

部屋を振動させるノックの音。彼女はゆっくりと起きあがり、扉を見つめた。

「チェリー様、ブリーズです。お入りしてもよろしいですか？」

恨めしい、だけど愛しい騎士の声。チェリーはホツとし、肩の力を抜いた。読みかけのページにしおりを挟み、入室の許可を下す。しかしドアの奥から現れたのは、意外な人物だった。

「お父様？」

ブリーズの一步手前に立つ、初老の男。それは紛れもないこの国の王、そしてチェリーの父であった。

チェリーは彼の突然の来訪に、驚きを隠せない。王は休む暇もないくらい忙しい身だ。そう、愛娘に会う時間だつてなかなか取れないはず。

それなのに、一体なぜ？

疑問に思う反面、彼女は理解していた。

時間を潰してまで、来た理由。きっと何か、大きな用事でもあるのだろう。

なんかあったかな？

舞踏会なら前にやったばかりだし、レッスンだってそこまでサボっていない。

思いあたる節など。

「チェリー」

低く穏やかな、けどどこか威厳がある声色。彼女は自分のもとへ近寄る我が父を、黙って見つめる。王の後ろのブリーズは、心なしか浮かない表情をしていた。

「明日、私の客が来るんだ」

王は言う。

「……客？」

「そう。古くからの知り合いだ。そして、その息子も連れて来るらしいんだ。私も以前会ったが、その息子とやらがまた才気溢れる子でね。まだ十六という若さだが、大人顔負けの教養を持っているの

だ」

少しずつ、チェリーは父の言いたいことが予想できてきた。しかしそれは彼女にとつて有難迷惑な話で。

出来れば外れてほしいと祈る。

「身分もそこそこだし、どうだ？ 一度会って」

「お父様」

言い終わらないうちに遮った。

「会えと言うなら会うわ。だけど、前に言った通り私はよくも知らない人と婚約するつもりはない。見合いなら御免被るわよ」

強い眼差しを向けるチェリー。王はしばらくそれを受けていたが、唐突にため息を吐き出した。その反応に、チェリーの頬が微かにひきつる。

王はそんな彼女に、しゃがれた声で言い放つてみせた。

「チェリー、今まではそなたの我儘を聞いてきた。しかしそうこうしてゐるうちにお前は十八歳。そろそろ正式な婚約者を決めたいのだ」

分かるだろう？と目を細める。その最もな正論に、チェリーは言葉詰まらせた。

自分の身分くらい痛いほど分かっている。こんな言い分、いつかははね退けられるだろうと思っていた。それが、今きてしまったのである。

黙っている娘に、王は顔を歪ませた。本当は強制したくない。可愛い娘だ。ただでさえ他の男に差し出すなど、嫌なのに。

「…ブリーズ、お前はどう思う？」
「えっ」

突然話をふられたブリーズは、返答に困った。まさかここで聞かれるとは思ってもしなかったのだから。

しかし、それよりもチェリーのほうが心臓を高鳴らせていた。彼は一体、なんと答えるだろうか？

ブリーズは突き刺さるふたつの視線を浴びながら、はっきりとした口調で言った。

「私は、護衛の身分。姫君が幸せならそれでいいのです」
「……そうか」

否定は、しないのね。

分かっている。彼の性格上、止めるわけないのだ。分かっているが、やはりチェリーは少なからずショックであった。

悲しむな。

傷付くな。

口唇を噛み締め、彼女は必死に自分へ言い聞かせる。

「明日だ、チェリー。…会って、くれるな？」

チェリーは小さく頷いた。

窓を叩く雫が、大粒になっている。空はますます暗くなり。流れる雲の速度が、風の強さを物語っていた。

「だから雨は嫌いなのよ」

誰に言うわけでもなく零した彼女の声は、風雨のノイズに掻き消された。

姫と騎士の恋愛事情

騎士の予感

十 騎士の予感十

ブリーズは椅子に深く座り、ため息をついた。窓から見える空はひたすら青い。昨日の雨など嘘のように、晴れわたっている。

落書きのように散りばめられた雲は、手を伸ばせば掴めそうで、昼の細く白い月は、みとれるほど綺麗で儂い。

今日は、姫君の婚約者になるかもしれない人物がくる。チェリーは乗り気ではなさそうだが、王の命令だ。さすがに逆らえなかったのだろう。

まだ16の若さだと聞いた。しかし、貴族には若いうちから婚約者はいる。不思議な話ではない。

しかし王族と結婚するなど、かなり身分が高くないと不可能だ。

陛下は知り合いと言っていたが：他国の王子か？

ブリーズも詳しいことは聞いておらず、顔だっただけで見ていない。

彼は二度目のため息をついた。

護衛とは主人の幸せを願うもの。口出ししてはいけない。邪魔するなんてもつての他。姫君を無粋な輩から守り、常に傍らに寄り添う。

主以上の感情を抱かない。

それが暗黙のルール。しかしチェリーは彼を好きだと言う。そして同様に、ブリーズも彼女に愛しさを感じていた。

とは言っても所詮身分違いの恋。祝福してくれる者は少ないだろう。

側にいればそれでいいなんて、綺麗事だ。

何やら廊下が騒がしい。部屋から出て近くにいたメイドに何事かと尋ねる。

「姫君がいなくなったのです！ ああ、もう公爵が来るというのに……！」

忙しそうに言い、彼女は走っていった。

「公爵……。公爵の息子なのか？」

てっきり王族の者だと思っていたブリーズは、少しばかり驚いた。

それにしても。まさか今日、この日に城をぬけだすとは……。

その大胆さには、さすがに感心する。

「しかし、公爵と言ってたな。陛下と馴染みの深い公爵といったら……」

そこでブリーズはハツとした。思い当たる公爵の名前を思いだし、重大なことに気付いたのである。

「まさか！」

彼は走りだした。

迷路のように複雑で、気が遠くなるほど広い城内。そこで一人の女性を探すのはとても困難な行為だ。

「そっちは!?!」

「だめです、いません!」

「くっ、姫君はいつたい何処へ行ってしまったんだ……」

使用人たちが慌ただしくかけまわっている。無理もない。大切な客人が来るといふのに、肝心の姫君がいないのだから。

「いいか。陛下には言うなよ。なんとしても見つけるんだ」

そう言って彼らは、長い廊下を走る。その様子はかなり拳動不審だ。

「……行つたわね」

壁に身体を這わせ、曲がり角からその場面を見ていた彼女、チエリーは息を吐きだす。

「まったく、婚約なんて冗談じゃないわ。しかも16歳って……年下じゃない」

心底嫌そうに彼女は呟いた。

チエリーは、自分のやっていることがどれだけ大変なものか分かっていて、城から脱走しようとしてるのである。

嫌なものは嫌なんだもの。

そんな言い分、他人が聞いたらただの我儘だ。しかしチェリーにとって、決められた結婚は、苦痛でしかない。

それに私が好きなのは、ブリーズだし。……未だ相手にされてないけど。

アプローチ方法が悪いのかしら？なんて頭をひねるチェリー。

彼女は気付いていないが、それは十分に効果を発揮している。ただ、主と護衛という厚い壁があるだけで。それさえなければ、二人は一緒になっているだろう。

「どうして、私は姫なんだろう」

普通の町娘がよかった。普通の友達がいて、普通の恋をして、普通の人生を送る。

ないものねだりだが、チェリーに姫という身分は正直鬱陶しかった。

でも、もしそうならブリーズとは会えなかったよね。どちらにしても、満足できないか。

利と損はつきもの。改めてそう感じるチェリーであった。

「おお、久しぶりだなエア公爵」

「そんな他人行儀なことを仰らないで欲しいな陛下。フォーリッジと呼んで下さい」

「君こそかしこまった口調して……。まあお互い様か」

その言葉に笑いあう王とエア公爵。彼の傍らには、まだ幼さの残る顔立ちをした少年が立っている。ハニーブラウンの髪をして、瞳は淡い空色だ。利発そうな雰囲気纏っている。

「……おや？ あれは」

何かに気付いた王が、首をめぐらせた。その視線を追う二人。そこには、金髪を高い位置で結った若い女性が。

桃色のドレスは厚手の絹で。見ただけで上質だと分かる。城内でそんなドレスを着た者など、なかなかいない。そのうえ挙動不審で。全てを悟った王は呆れのため息がこぼれそうになるのを堪え、彼女の肩に手を触れた。分かりやすく、跳ね上がる身体。彼女は、ゆっくりと振り返った。

「何をしてるんだ？ チェリー」

「お、お父様……」

ひきつる頬。まさか逃げようとしてたなんて言えるはずなく、

「遅いので、心配になり見に来たのです」

とつさに嘘をついた。

王はそれを見抜き、苦笑いを浮かべる。これ以上責められぬよう、チェリーは公爵に目をむけた。

「初めまして、フォーリッジ＝エア公爵。御会いできて光栄ですわ」

ドレスの裾をつまみ、的確な角度でお辞儀をする。普段のお転婆ぶりからは想像つかないほど、その仕草は優雅であった。

公爵も感心の吐息を漏らす。

「いや、さすが姫君ですね。なんて素敵なレディであることが
「お褒めに預かり恐縮です。そちらは公爵子息の
「

そう言いかけて、チェリーは口を噤んだ。否、驚きに言葉が出てこないのである。公爵の隣にいる少年は姫を見て、微笑んだ。それに彼女はハッとする。

「あ、あんたリー…むぐつ！」

「初めましてチェリー姫！ 私はリーフニアと申し上げます。以後お見を知きりを」

チェリーが叫ぶ前に、彼女の口を塞いだ少年。さわやかな笑顔に、チェリーはまだ目の前の光景が信じられなかった。

「ふむ。では我々は向こうで話そうか。リーフ、といったな。チェリーを頼むぞ」

「はい、陛下」

王とフォーリッジは立ち去る。チェリーは公爵子息と残された。

「ん~~~~~！」

「え？ あつと。忘れてた忘れてた」

「ぶはっ！」

彼はチェリーの口にあてがっていた手を離す。チェリーは大袈裟に咳き込み、深呼吸を繰り返した。

そしてもう一度、目の前の少年を見つめる。身なりのせいかわいぶん違って見えるが、間違えるはずがない。

何度も顔を合わせたのだから。

「……あんだ、本当に」

チェリーはかすれた声で尋ねた。

「リーフ……なの？」

彼はチェリーの髪を一束掬う。チェリーの瞳に映る、愉快そうに口角を上げる少年。

「そうですよ、姫君。いや、チェリー」

彼女は耳を疑った。

何度も見た顔。

何度も聞いた声。

何度も、何度も。そう、町へ出かける度に。

町での友達。名前はリーフ。それ以外、何も知らなかった。知る必要がなかった。

だけど、お世辞にも綺麗とは言えない衣服に、悪い言葉使い。一般庶民だと思っていた。だから安心してチェリーは仲良くなった。

「……なんで……」

「お互い様だろ？」

先ほどの高貴な笑みではなく、イタズラな笑顔。それは彼女の知ってる表情で。

「初めまして姫。久しぶりチェリー」

リーフはそう言った。

町娘だと思ったら、一国の姫で。
庶民だと思ったら、公爵子息で。

嘘をついていたのではなかったのだから、裏切りではない。

しかし、チェリーの心には、確かな痛みがはしった。

姫君の安息

十 姫君の安息十

目の前の少年はただただ、人懐っこい笑顔でチェリーを見つめる。彼女はそんなリーフを見つめ返しながら、頭の中はひどく混乱していた。

なぜ。どうして。そんな疑問符が浮かんでは消え、浮かんでは消え。

チェリーは震える握り拳をそっとほどき、リーフの胸へと持っていく。ぶつかる強い視線。彼女は彼の首もとのスカーフを掴み、叫んだ。

「騙したなこのエセ貴族ー！」

喉が絞まり、リーフはぐえつとひしゃげた声をだす。

「なあにが『初めまして姫』よ！ バカにしてるの！？」

「ちよつ、落ち着けチェリー！ 死ぬ死ぬ！」

「お黙り！ あんたに拒否権はないわ！」

「横暴だぞ！ っていうか、こんな所でそういうこと叫ぶな！」

その指摘にチェリーはハツとし、手を放した。確かにここで騒ぎたてるのは良くない。

姫と公爵子息が揉みあってる光景などを、城の誰かに見つかって

はまずいだろつ。
チェリーは未だに咳き込んでいるリーフの手を引き、自室に向かった。

チェリーはベッドに座り隣をパンパンと叩いて、リーフも腰掛けるよう促す。

リーフは少し迷ったが、早くと急かされたので仕方なく座った。

「……で、どういうことか説明してくれる？」

「お顔が恐いですよ、姫」

明らかにからかっているその言葉に、チェリーの眉間に皺がよる。普段あのお世辞にも綺麗とは言えない口調を聞いていたせいも、違和感が拭えない。

チェリーの怒りに気付いたリーフは、冗談だよと慌てて言った。彼女はまだ不機嫌な表情をしていたが、このままでは話が進まないのか抑える。隣に座る少年を見つめ、説明してともう一度言った。

「俺もチェリーと同じ。屋敷から脱け出して、町で遊んでたわけ。あ、でも俺はお前と違ってバレたことねえよ」

得意気に言うリーフに、チェリーはムツと口を尖らせる。確かに自分は何度も気付かれ、その度にどこかの堅物騎士に怒られているけれど。

「て、っていうか、リーフは私のこと姫って分かってたの？」

「いや、最初はただの町娘かと思った。まず格好が小汚かったし。まあ、やけに気品があるというか高飛車だなとは思ってたけど」

「……じゃあ、いつから」

「そりゃ、一応俺だってこの国の一員だからな。名前くらい知ってるし」

偽名使えばよかった、とチェリーは後悔した。自分は少しばかり、いや、かなり姫としての自覚が足りないのだろう。

それにしても、と彼女は隣の少年を見た。多少の名残はあるものの、同一人物とは思えないほどの変わりようである。

纏っている服装のせいだけじゃない。雰囲気も普段の彼とは全然違う。現にチェリーはリーフと直ぐに分からなかった。

「な、なんだよ。そんなに見るなって」

頬を赤く染め、リーフは小さく身構える。

「いや……すごい演技力だなんて思ってさ。あんな馬鹿そうだったのに」

「失礼だな！」

「だから騙されたって言ってるじゃない。なにあなた、猫かぶってるの？」

フォーリッジ公爵の前でのさわやかな笑顔、丁寧な言葉遣いを思いつく。今はかなり態度が違う。

チェリーの問いに、リーフはまあなと頬をかきながら答えた。

町に出かけるのは、ストレス解消かしら？

自分の本当の性格を隠すなんて、疲れるに決まっている。他人ならまだしも、家族相手なら尚更だ。そんなことしていたら、誰だっ

て精神が参ってしまうだろう。

彼の心情を思い、少しばかりナーバスになる。しかしそんな彼女の気持ちを、リーフの次の言葉がガラガラに崩した。

「あ、でも家ではこんなだぜ？」

へっ、と思わずチェリーは漏らす。しかし構わずリーフは続けた。

「だから、猫かぶってるのは偉い人の前でだけ。俺自身は普段からこんなだよ」

それはつまり、先程の態度は王の前でだからであって。実際は、他人でも家族でも、目上の者ではないならこの少々ずさんな自然体ということだろう。

し、心配して損したわ……！

私のセンチメンタル返せ！という言葉に、リーフはなんじゃそりや、と肩をすくめた。

それにチェリーは更に不機嫌になるが、あることに気付き、みるみるうちに笑顔へと変わる。分かりやすいそれに、リーフは首を傾げた。

「ふふ、だって、相手がリーフって分かったなら安心だもの。私、まだ結婚したくないのよね。っていうか、決められた結婚が嫌なの。どうやって断ろうか悩んでいたところだけど、リーフなら簡単」

スラスラと弁舌爽やかに話すチェリーは、リーフの眉間にしわが寄せられていることに気付かない。

「二人でお父様と公爵を説得すればきつと納得してくれるわ。リーフだって、こんな形の婚姻は嫌でしょ？」

同意を求めるといふよりは、YESが前提である言い方。リーフは目を細め、ベッドにつけていた右手をゆっくりとあげた。警戒心のないチェリーはそれに気付いても、動かない。やがてその手は彼女の薄紅色の頬にそえられる。

「俺は、相手がお前なら」

吐息混じりの声。絡む若草色と空色の視線。

「リーフ……？」

そして彼の左手も、彼女の頬へと移動して。二人の距離は、わずからセンチ。

ブリーズは焦っていた。なぜもっと早く気付かなかったのだろうかと自身を責めたが、既に後悔先に立たずである。

見覚えはあったんだ。ただ、服装と言葉遣いのせいで見抜けなかった。

小さく舌打ちしながら頭に浮かべるのは、空色の瞳の少年。町で姫君といた、見た目は一般庶民の。リーフ。そう、リーフ＝エア。貴族ならば、エアの名を知らぬ者はいない。王族にさえ劣らない、高等貴族なのだ。

だから余計に、信じられない。公爵子息ともあるう者がなぜ……。
疑問と焦りを感じながら、ブリーズは広い廊下を大股で歩く。行く先は、我が姫の部屋。

扉の前まで着き、しかし彼はそのノブに手をかけることを躊躇っていた。自分は何に対して焦り、苛立っているのだろうか。

開けるべきではないかもしれない。たかが護衛が口出しすることではないのだ。

だが、そんな彼の考えは吹き飛ぶ。

「や、やだリーフ……!!」

その声が耳に届いた瞬間、ブリーズは勢いよく扉を押し開いた。

騎士の焦燥

高飛車な瞳。真珠の肌。薔薇色の頬。

挑発的な笑みと、時折見せるはにかんだ表情。

そして、俺を呼ぶ高い声。

幼い頃からずっと見てきた。守ってきた。誰にも傷つけさせなにかしなかった。彼女を守るためなら、何でもやると誓った。

↑騎士の焦燥↑

「チエリー様！」

ブリーズはその重い扉を難なく押し開き、愛しい姫君の名前を呼んだ。そして彼の視界に映ったものは、想定外に

「いひゃい、いひゃい！ はなひなひゃいよ！」

「あ、ごめん。つい」

頬を引つ張るリーフと、それに涙声になりながらも少年の手を振り払うチェリー。周りに花が見えてもおかしくなくらい和やかな光景に、ブリーズは膝をつきたくなった。もちろん、実際は気合いで止めたが。

「まったく、なんなのよ。……あら、ブリーズじゃない。どうしたの？」

彼女のなんでもないとといった様子は、彼を安堵させると同時に恨めしい気持ちにもさせた。

自分の早とちりに気まずくなったブリーズは、目をそらして回答をにごす。しかし悲しいことに、チェリーは引き下がってくれない。

「だって、なんか変な顔してるわよ」

その言葉に、チェリーの隣に座っているリーフがくすくすと笑う。睨みをきかせると、彼は明後日の方向を見て口笛を吹くというベタな行動をした。

変な顔……か。

確かに、自分はきつと情けない表情をしているだろう。そのくらいブリーズにもわかる。

第一、やけに仲の良い2人を見ているだけでイライラしている自分を理解していた。

彼らが同じ寝台に座っているだけで、楽しげに話しているだけで、触れ合っているだけで、どうしようもないくらい複雑な心境になっていることに彼は戸惑う。

否、きつと心の奥では気づいているのだ。それがなんという感情かを。しかしそれを認めてしまうことをブリーズの生真面目さが拒

絶していた。何故なら、もし認めてしまえば歯止めがきかなくなる。それを彼は恐れていた。

本当に、情けない俺は。

ため息をつくブリーズに、チェリーは気づかない。鋭いようで、彼女は時々ものすごく鈍感だ。

「あ、そうだブリーズ。私の婚約者って、リーフだったのよ。本当にびっくりよね。意外とかのレベルじゃないわ」

くすくすと楽しそうに笑うチェリーに、ブリーズは返事ともため息ともとれる言葉をこぼす。昨日のあの憂鬱さはどこにいったのだと小一時間問い詰めたい程、今の彼女は明るい。

しかしその笑みを見て安心している自分がいることに、ブリーズはいったい己はどれだけ姫君に甘く、また愛しいのだと苦笑した。

ただその愛しいという感情が、主を慕う愛なのか、はたまた一人の女性として想う恋情かは、彼はまだ気付かない。

ブリーズはチェリーからそつと視線をはずし、彼女の隣に腰掛けしている少年を見る。改めて、町中で見たときとは別人だと思った。

あの時は服装も今よりずっとみすばらしかったし、くるくると変わる表情は年相応でもあったのに。それが今はどうだ。気品の漂う仕草に、大人びた瞳。いったい、どちらが本当の彼であろう。

そんな取り留めのないことを考えていた時、リーフがさてと、と言って伸びをした。

「このままじゃ俺と婚約者になっちゃうけど、どうする？」

「えー、リーフが婚約者ー？」

「お前ホント失礼だな！」

あからさまに嫌な顔をするチェリーに、リーフはいきり立って、それを彼女は無邪気に笑う。町中で見た時と同様、仲睦まじい姿に、ブリーズは拳を握った。

彼女の隣はずっと、自分のものだと思いこんでいた。……そんなこと、有り得るわけがないのに。

無自覚に、自惚れていたな。

もう昔のように、自分にいつも甘えて寄り添っていた幼い少女ではない。いつさなぎの殻を抜け出し、その美しい羽をはばたかせてもおかしくはないのだ。たとえそれが今でも、嘆いてはならない。

「っていうか、リーフはどうなのよ。私と婚約しろって言われてできる？　今まで町でしか会ったことないし、ずっと友達と思ってたのよ？」

「まあ確かに、チェリーが婚約者、と言われてもピンとこないけどさ」

そう答える少年に、チェリーはほらみるといわんばかりに胸を張る。

「でも、俺としてはなってもらわないと困るっていうか」

「……どうしてです」

リーフの言葉にチェリーが叫ぶより早く、ブリーズの低い声が遮った。二人が同時に振り向く。

思わず口をはさんでしまったことに舌打ちしたい気分になったブリーズだが、それよりもリーフの答えが気になった。リーフはブリーズとチェリーの間を何度か視線を泳がした後、語弊があったな、と言っ。

「なつて欲しいのには変わりないんだけど、実際はふりをして欲しい、かな」

「はあああ!?!」

予想外の言葉に、今度こそチェリーは叫んだ。

「なによそれ! なあんで私がリーフの婚約者のふりなんかしなきゃいけないのよ!?!」

「いや、理由は言えないけど……」

「もつとふざけんなあ!」

「いててて! ちよつ、姫様がこんな暴力ふつていいのかよ!」

「ええい、お黙り!」

「酷っ」

再び言い争いを始める彼らに、ブリーズはため息をつきたくなつた。いや、実際に小さく吐き出した。

彼は少年に襲いかかっている我が姫君の肩をひき、落ち着いて下さい、となだめる。その言葉にチェリーはだつて、と不満げな表情をし、

「こんなの納得出来ないじゃない! ブリーズだつてそう思うですよ!?!」

「それはまあ……そうですが……」

煮え切らない護衛の答えに、チェリーは眉をひそめた。そんな様子を見て、フォローを入れようとリーフが彼女の服の裾を軽く引く張る。

「理由はまだ言えないけど、いつかちゃんと言うし、それに本気で

「婚約はしねえから」

「当たり前よ！ 第一それでも私はいや！」

「……本当に高飛車だな、チェリーらしいけど。まあ、確かにいきなり婚約者のふりしろは無理あるよな」

腕を振り払われひとり頷く少年に、チェリーは分かっているじゃない、とでも言いたげに若草色の瞳を鋭く光らせ上目に睨む。

仮にも相手は公爵子息だということのになんと無礼な行為だろう。いや、むしろそれを考えるは一国の姫相手に馴れ馴れしく触れるリーフの方がずっと無礼かもしれない。

だがそれはあくまで2人が他人だった場合だ。彼らは互いに友人だと思っているし、現在進行形で婚約者にまでなろうとしている。もちろん、本人の希望ではないが。

「この頼みは俺のエゴだ。でもよく考えてみるよ、チェリーにとっても悪い話じゃないだろ？」

「……どうということ？」

「まだ婚約したくないんだろ？ ふりとはいえ俺と婚約者になれば、周りから何も言われないじゃん」

ニカツと年相応に笑うリーフに、チェリーは顎に手をそえ考え込む姿勢に入る。

まさか承諾するのか……？

絶対に断ると考えていたブリーズは、彼女を見て内心驚いた。断つてほしい、と思う。第一、こんな戯れ事許されない。止めるべきだ。

そう結論し、言葉を発しようとした時

「よし、決めたわ！」

チェリーが声高らかに言い握り拳をつくった。

「あんたの企み、のってあげるわ！」

「いや企みって」

ブリーズは目眩がした。

「なっ…にを馬鹿げたことを仰っているのですか姫君！」

「止めないでよ、もう決めたわ」

「なりませんそんなこと！」

「どうしてよ。あ、もしかして妬いてる？」

「チェリー様！」

ブリーズが声を荒げれば、チェリーは分かっているわよ、と顔をしかめる。

なにがどう分かっているのだろう。いや、チェリーも我が道を通っているとはいえ、姫の自覚はある。それが良いことか悪いことかくらいは理解しているだろう。

「大丈夫、陛下と父上にはまだ分からないから何度か会いたい、って伝えるからさ」

二人を宥めるようにリーフが笑い、ベッドから立ち上がった。

「止めたい気持ちは分かりますけど、このことは他言無用でお願いしますよ、ブリーズ殿」

柔らかな声色と利発な笑みを浮かべ、少年は人差し指をたて口唇にあてがう。先程とは対照的なかしまった敬語にブリーズは眉間にしわを寄せた。

「無茶なことを」

「お父様にバラしちゃ駄目よブリーズ」

「チェリー様、本気で言ってるのですか。よく考えてみて下さい。

ふりをして、いつ本当のことを言うのです？ きつと陛下とエア公爵は喜んで式の準備をしますよ」

彼のもっともな指摘にチェリーは言葉に詰まったが、リーフが横から口をはさむ。

「だからまだ陛下達には言わないって。今日はただの顔合わせなんだから、仲良く話しましたって報告すればいいんだよ」

「そ、そうよね。それにそうすれば、これから町以外でもリーフとちよくちよく会えるし」

そう言ってチェリーはブリーズの腕を叩くが、彼の表情は厳しいまま何も言わない。

チェリーはため息をつき、もう何を言っても無駄と解釈したのだろうか、ブリーズから離れ部屋の外へと繋がる扉に手をかける。リーフもそれに続くように彼女の後を追う。

「……公爵子息、貴方はなぜ町にいたのですか？」

部屋の外へと出ようとする少年に問うブリーズ。その質問に彼は足を止め振り返り、切なげな笑みを浮かべた。

「会いたい人が、いるからね」

彼等はその後王と公爵に会い、様子を聞かれた。それにチェリーが答えるより早くリーフが二人に爽やかな笑顔を向ける。

「はい、とても素敵な姫君で大変貴重な時間を過ごせました。婚約の方も前向きに考えたいですね。姫君に支障がなければ、私はこれから何度かお会いしたいと思います」

王と公爵が嬉しそうに笑う横で、チェリーとブリーズが少年を見て誰だよと心の中でツッコミをいれたのは、言うまでもないだろう。

姫君の明暗

これが罪だと誰が決めたの？ 誰も言ってないわ。あなたが勝手にそう思いこんでるだけでしょう？

手をとることも抱き合うことも、愛しているならおかしなことではないはずよ。

だけど、もし。そう、もしこの気持ちが罪だというのなら。私は罪人と言われてもいいわ。罰を受けてもいいわ。

祝福はされないかもしれない。けれど思いは止められないのよ。

だって、こんなにも恋い焦がれているのだから。

十 姫君の明暗十

「何を考えているのですか貴女は！」

彼の空気を切り裂く怒声に、チェリーはソファにもたれかかった

まま、耳を塞いで眉をひそめた。

絶対になにか言われると分かっていたとはいえ、実際こんなにも叫ばれると不愉快と感じる気持ち顔にありありと出てしまう。

そしてそれを見たブリーズは更に顔を赤くし怒りを露わにするのだが、理性が働いたのか、拳を握り締め抑えた。

その様子を見てチェリーがほつとすると、彼はわざとらしい咳払いをひとつする。

「……姫君、今からでも遅くはありません。あの話は断りましょう」

先ほどとは打って変わって落ちて着きのある声色でブリーズが言う。しかしチェリーは冗談じゃないと思った。

やっと、見ず知らずの奴との政略結婚の道を逃れられるんだもの。ここでリーフの提案を蹴つたらいつまでも進めないわ。

そう、行動を起こさなければいつまでも現状は変わらない。これは彼女にとって最大のチャンスなのだ。

「それに、ブリーズは一向に振り向いてくれないし」

「っ、それは……」

「私が姫だから？ それともブリーズが私の護衛だから？ そんな理由にならないわ。確かに、反対する人はたくさんいると思う。

でもまだ分からないじゃない。何も言ってもないんだもの。もしかしたらお父様だって」

「貴女は分かってない！」

突然叫ばれた彼の荒い声に、チェリーは肩を揺らした。

「もしかしたら？ 本気でそんなことを思っているのか？ 俺は貴女の護衛だ。そう、レイク家は代々王家に仕えてきた。相互の信頼は何よりも厚い。それを今俺が姫に手を出したとすれば、その信頼

を壊すことになる。それがどんな裏切りか貴女は分かるか!？」

「分からない、わよ……」

「……なに?」

「それって結局ブリーズが怖がつてるだけじゃない! 騎士の信念が許さない? それとも自分の立場の保障? そんなの、そんなの理由にならないわよ!」

悲痛な叫びが空気を切り裂くと、深く重い沈黙が落ちる。互いに何も言わず、ただうつむくばかりだ。

チエリーは悔しくて悔しくて、ひたすら手を握る。爪が手のひらの肉に食い込むのも気にならなかった。

だって私は、ブリーズと一緒にいれるなら姫なんかやめたって構わない。

他人が聞けばそれは世間を知らない彼女のわがままである。けどチエリーは、本気でそう思っているのだ。

一瞬にも永遠にも感じた気まずい空気。それをやぶったのは、立ちすくんだままのブリーズだった。

「……リーフ様の婚約者のふりは反対します。しかし、ふりでないなら止めません」

低く落ち着きのある声で、温度を感じられない冷たい瞳で、あまりに残酷な言葉を。

チエリーは彼の口にしたそれに目を見張る。今、自分の聞いた言葉が信じられない。これは本当に彼? そんな錯覚にも陥るほど、彼女は驚いたのだ。

「…私に、リーフと結婚しろって言うの…?」

「……………」

沈黙は、肯定。

チエリーは自分の顔がみるみるうちに熱くなるのが分かった。怒りか、混乱か。しかしそれと同時に手足の指先はスツと冷えていく。恐ろしいほど、冷たく。身体が熱と冷えで混ざり合う感覚に、目眩がした。

そして気がつけば、彼女は部屋から飛び出していた。

足音が遠ざかるのを聞き、部屋に一人残されたブリーズはため息を吐き出す。

なぜ、あんな売り言葉に買い言葉のようなことを言ってしまったのだらうか。

……否、あの言葉は本心である。彼女が幸せになる為にも、自分が妨げになるわけにはいかないのだ。そう、彼は間違っていない。本当のことを言っただけだ。

「なのに、何故こんなにも辛い……………」

愛しく思えば思うほど、貴女を傷付ける。

分かってる。分かってる。身分違いの恋ってことも。貴方が私の気持ちに困っているのも。

だけど、諦めろというなら、私のこの膨らみすぎた想いの矛先はどこに向ければいいの？

想うことさえ許されないというなら、きつと私は、壊れてしまふ。

「チェリー!?!」

無我夢中で走っていた途中で、聞き慣れた声が耳に届いた。彼女はそれに、やっと足を止める。

「お前、そんな格好で町に出るなよ!」

リーフだ。城で別れてから一時間もたつてないというのに、彼はいつもの些か小汚い服に身を纏い、民に混ざっていた。

しかしチェリーは、そのことに驚く余裕はなかった。リーフを見た途端、嘘みたいな量の涙が溢れてきたのだから。ずっと走っていたせいで息切れもしているというのに、泣いてしまったら呼吸も満足に出来ない。死んでしまおうだ、チェリーは本気で思う。

それを見たリーフはギョツとあわてふためく。しばらく手を空中でさまよわせた後、決心がついたのか彼女の腕をひき、家と家の間にある細い路地裏に導いた。

「大丈夫かよチェリー。ほら、そんなに泣くと化粧落ちるぞ」

そう言つて、リーフはチェリーにハンカチを手渡した。青地に金の刺繍が入った、彼の今の形なりには似合わない上質なものである。

「鼻はかむなよ」

チェリーは思いきりかんでやった。

「ちよつ、言ってるそばからあああ!」

「うっ…揺らさないでよ…、また泣きそうになるじゃない」
「泣きそうっていうか、現に泣いてたたる」

それは彼女も十分理解していたので、言い返さなかった。チエリはすん、と鼻を鳴らしてリーフにハンカチを返す。少年は少し嫌そうな顔をしたが、何も言わずそれを懐にしまった。

「とりあえず、その格好はまずいよな……」

ドレス姿のチエリを見て呟く。その言葉に、余裕なかったから、と彼女は返した。

ただひたすら逃げ出たくて飛び出してしまったが、確かにこの行動はあまりに軽率だったかもしれない。チエリはそう思い、いかに自分が混乱してたのか痛いほど分かった。

貴族だって思われていればいいけど……。

もし姫ということがバレたら大変だ。一国の姫が町でぶらぶら遊んでいるなんてことが国民に知られては、きつと城の内情をけなされる。

……いや、本当は知っている。そんなことするような人達ではないと。知っているのだ。だから、彼女はこの町が、国が愛しいと思う。

まあ、それでも不謹慎なものには変わらないけど。

「とにかく、着替えた方がいいよな。話はその後だ」

「着替え……って」

いったいどこで？ そう尋ねると、リーフは悪戯っぽく笑い

「着いてからのお楽しみ」

そう言って、チエリーの腕をひいた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6234c/>

姫と騎士の恋愛事情

2009年6月29日19時14分発行